

ユーザーレポート User Report

ゼロ
0の証明

個人

父を加害者にさせない 20年の葛藤を経て、家族が手に入れた「安心」という名のブレーキ

ご利用機器

カメラ付き
アルコールインターロック装置

ALC-ZERO II



忍び寄る「依存」の影、 平穏な日常を蝕む20年の恐怖

愛知県に住むTさんと、県外で暮らす姉のYさん。二人がお父様の異変に気づいたのは、Tさんがまだ高校生だった20年ほど前のことでした。お父様は、家族の前では決して深酒をせず、子煩悩で真面目な「良き父」でした。しかし、その平穏な家庭の裏側で、誰にも気づかれないように「恐怖」は根を張っていたのです。家族の目が離れた一瞬、戸棚の奥に隠された酒をあおる。そんな、家族を欺くような「隠れ飲酒」が、いつしかお父様の日常になっていきました。

「父は精神的に脆い部分があり、現実のストレスから逃げるようにしてお酒に依存していきました。最初は小さな綻びだったのかもしれませんが、気づけばそれが20年というあまりにも長い年月、当たり前の光景になってしまっていたんです」とTさんは振り返ります。

過去には脂肪肝で入院しました。それでも、仕事に向かう軽トラックの足元に転がる空き缶や、ふとした瞬間に漂う酒の臭いが消えることはありませんでした。「今日は大丈夫だろうか」「もし、今この瞬間に誰かを撥ねてしまったら……」Yさんは、遠く離れて暮らしていても、実家から届く何気ない便りの裏側に、常に「最悪の事態」を想像してしまう拭えない恐怖を感じていたと言います。

一見、どこにでもある幸せな家族。しかしその足元では、飲酒と運転が隣り合わせという「いつ爆発してもおかしくない爆弾」を抱えたまま、薄氷を踏むような毎日が続いていたのです。



決断の瞬間

～お盆の帰省で見た、あまりに「平然」とした一線～

事態が決定的な局面を迎えたのは、2025年8月のお盆休みでした。久しぶりに家族全員が実家に集まり、孫たちの笑い声が響く、賑やかで幸せなひととき。しかし、その「家族の団らん」の裏側で、Yさんは目を疑うような衝撃的な光景を目の当たりにします。

それは、お父様が車のハンドルを握っていた、まさにその時でした。家族の目が一瞬離れた隙を見計らい、慣れた手つきでウイスキーの小瓶を取り出すと、まるでお茶でも飲むかのような「当たり前」の仕草で一気に煽ったのです。「隠れて飲んでいる」という後ろめたさすら感じさせない、あまりにも平然とした、そして手慣れたその動作。

それはお父様にとって、飲酒運転がもはや「特別なこと」ではなく、日常のルーティンに深く組み込まれてしまっていることを冷酷に示していました。「その姿を見た瞬間、血の気が引きました。父は今、このまま私たちや孫を乗せて走ろうとしている。『お父さん、何を飲んだの?』……問い詰める声が震えるほど、絶望的な恐怖に襲われました」とYさんは振り返ります。

この訴えを聞いたTさんの心にも、激しい葛藤と怒り、そして悲しみがこみ上げました。「自分たちには守るべき家庭があり、小さな子供たちもいる。もし万が一、父が加害者となって誰かの命を奪ってしまったら？あるいは、大好きな孫たちの命をこの手で奪うことになってしまったら？父の人生も、被害者の方の人生も、そして私たちの家族の未来も、すべてがその一瞬で修復不能に壊れてしまう」



絶望が生んだ慟哭

～「父への信頼」が崩れ去った瞬間～

「もう、言葉を尽くして説得する段階は、とうに過ぎていたのかもしれませんが」Tさんはあの日、自分でも制御できないほどの激しい怒りに身を投じました。それは決して準備されたものではなく、信じていた父に裏切られた瞬間の、魂の叫びでした。

ユーザーレポート

User Report

ゼロ
0の証明

個人

■ 期待を裏切った「空吹き」の呼気

その前日、Tさんはお父様と膝を突き合わせ、長い時間をかけて話し合いました。「お酒との付き合い方を考え直してほしい」と言葉を選び、心を込めた懇願に、お父様も理解を示してくれたはずでした。しかし翌日、親戚が集まる席で、お父様が車の移動のためにハンドルを握ろうとしたときです。Tさんが意を決して差し出したアルコールチェッカーに対し、お父様はあからさまに口元をずらし、測定を免れようとしていました。「父は、私や母、姉の想いを、その場しのぎの嘘で踏みじったんです」

■ 娘の涙と、捨て身の叱咤

チェッカーが非情なアラームを鳴らした瞬間、Tさんの理性を支えていた糸が切れました。「いい加減にしる！ この子たちの命を、私たちの気持ちを、なんだと思っているんだ！」静まり返った駐車場に、Tさんの怒声が響き渡りました。そばにいた愛娘は、見たこともない父親の激昂に怯え、泣きじゃくっていました。「本当は、あんな姿を娘に見せたくはありませんでした。親として、情けない後悔もしています。でも、あの瞬間の私には、そうやって叫ぶことしかできなかった……」

■ 「加害者」にさせないための断絶

その怒りは、父への憎しみではなく、「父を孫の命を奪う加害者にだけはさせない」という、息子としての最後の防衛本能でした。Tさんの激しい慟哭は、長年「少しくらいなら」と高を括っていたお父様の心に、かつてない衝撃を与えました。泣きじゃくる孫の姿と、必死に自分を止める息子の形相。そこにある「現実」を突きつけられたお父様は、提案されたアルコールインターロックの導入を、静かに、しかし重く受け入れることとなったのです。



※写真はイメージです

アルコールインターロックという 「物理的な解決策」

～家族が辿り着いた、命を守る砦～

言葉での説得に限界を感じていたTさんが、一筋の光を見出したのはインターネットでの情報収集でした。飲酒運転を根絶するための手段を必死に探す中で、「アルコールインターロック.com」のサイトに辿り着いたのです。そこには、自分たちと同じように親の飲酒運転に悩み、葛藤し、そして解決へと踏み出した家族たちの「ユーザーレポート」が綴られていました。「これなら、父を信じたい気持ちと、万が一への恐怖の板挟みから解放されるかもしれない」そう直感したTさんは、迷わず導入を決断しました。

※文章、写真の無断転載や抜粋、加工は固くお断りいたします。

当初、家族が希望したのは所有する2台の車両すべてへの取り付けでした。しかし、ここで一つの壁にぶつかります。メインで仕事に使う軽トラックへの設置はスムーズに進んだものの、もう一台の乗用車(外国車)は車両固有の特殊な仕様により、装置の取り付けが叶わなかったのです。しかし、家族の覚悟は揺らぎませんでした。

「1台できないからといって、抜け道を作るわけにはいかない」そこでTさんが考案したのは、「機器とルールの二段構え」という徹底した管理体制でした。インターロックを装着した軽トラックは、物理的に「飲んだら動かない」状態に。

一方、装着できなかった外国車には別途、盗難防止用のGPS追跡システムを独自に設置しました。エンジンがかかると即座にTさんたちのスマートフォンへ通知が飛ぶ仕組みを構築したのです。さらに、外国車を運転する際には、本人がアルコール検知器で測定した結果を必ずメールで家族に送るという厳格なルールを設けました。

「父は最初、この徹底した仕組みを煩わしそうにしていました。しかし、2台の車にこれほどの対策を施し、毎日通知をチェックし続ける私たちの執念を目の当たりにして、ようやく『自分一人の問題ではないのだ』ということをつらつら悟ったようです」

こうして、物理的な制限と家族による見守りのネットワークが組み合わさることで、お父様の逃げ道は完全に断たれ、家族は20年ぶりに心からの安心を手に入れることができたのです。



導入後の変化

監視ではなく「防波堤」としての仕組み

導入から数ヶ月。アルコールインターロックによって、お父様の行動には明らかな「一線」が引かれました。

以前は畑の行き帰りにコンビニで酒を買い、その場で喉を鳴らすことがありましたが、今は「飲めばエンジンがかからない」という物理的な制約が、お父様の無意識の習慣を強力に押し止めています。

しかし、20年来の根深い問題がすべて解決したわけではありません。お父様の飲酒量そのものは以前と変わらず、今も家族の目を盗んでは隠れてお酒を飲んでいます。お父様の「お酒への執着」という心の病は、今も静かに続いているのです。

それでも、TさんとYさんの心境は導入前とは劇的に違います。「父が今も隠れて飲んでいることは分かっています。でも、『飲んでも、ハンドルだけは握れない』この絶対的な安心感があるだけで、私たちの心の負担は全く別物になりました」

ユーザーレポート User Report

ゼロ
0の証明

個人

以前は、お父様が外に出るたびに「もしや飲酒運転をしているのでは」と疑心暗鬼になり、自力で見張らなければならない苦しみがありました。しかし今は、機械が客観的に、そして冷徹に判断を下してくれます。大きな安心材料となったのは、デモ機から本製品へと切り替える際、東海電子の担当者が解析したログデータでした。

そこには、お父様が毎日、不正をすることなく真面目に測定に取り組んでいる足跡が克明に刻まれていました。

「父も最初は、30分以上停車した後の再測定などを『煩わしい』とぼやいていました。しかし、データを見る限り、父なりにこの不自由なルールを必死に守り、向き合おうとしている。その実直なデータに触れたことで、私たちは少しずつですが、父への信頼を取り戻し始めています」同居するお母様からも「本当につけて良かった。ありがとう」と、安堵の言葉が漏れました。

お酒そのものを止めることは、まだこれからの長い道のりかもしれませんが、「命を奪う加害者にだけはさせない」という強固な防波堤を築いたことで、家族は20年ぶりに、疑うことのない穏やかな夜を過ごせるようになったのです。

同じ悩みを持つ方々へ

現在、お父様は孫たちに囲まれ、穏やかな時間を過ごされています。Yさんはこう語ります。「40歳手前になるまで、どこか放置してしまっていた問題でした。でも、命の重さは何物にも代えられません。導入費用や手間を理由に躊躇するよりも、一歩踏み出すことで得られる『心の平穏』の方がはるかに大きかったです」

Tさんも頷きます。「父が加害者にならない。それだけで、私たちの親子の絆も、これからの家族の時間も守られたのだと感じています」



※写真はイメージです

編集後記

今回のインタビューを通じ、アルコールインターロックは単なる「不正防止装置」ではなく、「家族の尊厳を守るための最後の防波堤」であることを再認識いたしました。

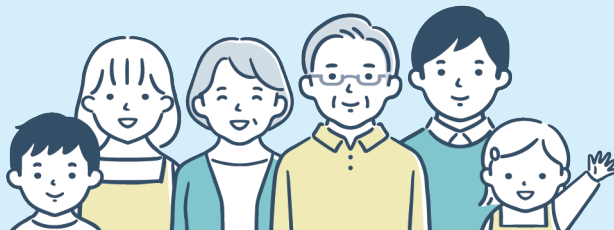
導入を決断されたご家族には、百通りの背景と、それぞれの切実な想いがあります。孫たちの前で声を荒らげなければならなかったT様の断腸の思い、平然とハンドルを握る父に絶望したY様の恐怖、そして誰よりも近くで事態を見守ってきたお母様の安堵。

私たちが目にするログデータの一行一行には、言葉にできない家族の願いが刻まれています。お父様の今後のお仕事や環境の変化についても、私たちは単なる「機器メーカー」ではなく、この大切なご家族の物語に伴走するパートナーとして、引き続き全力でサポートさせていただきます。

※文章、写真の無断転載や抜粋、加工は固くお断りいたします。

取材ご協力

家族を守る方法の手段として、
アルコール・インターロックを導入されたOさんご一家



アルコール・インターロック
社会実装と個人装着を推進する

特設サイト

アルコール・インターロック.com
～飲酒運転加害者をゼロに～

東海電子WEBサイト

【アルコール・インターロック.com】

<https://alcohol-interlock.com/>



LINE 公式アカウント

大切な人の飲酒運転で 悩まれていたら…

@700xyfip



いつでも LINE で ご相談ください!